

巻頭言

坂内英一（九大数理）

九大数理の最新の同窓会報で「『偉大な数学者たち』の愉しみ」という高瀬正仁さんの記事に目が留まりました。岩田義一の著書『偉大な数学者たち』の紹介でしたが、ひょっとしたらあれはこの本だったのかも知れない、とひらめきました。というのは、中学1年の頃に学校の図書室で読んだ本の一冊に、数学者を志すようになる過程で非常に強い影響を受けた本があったからです。大学生の時から、その本を探し出そうとさんざん試みたのですが、どうしても題名や著者が分らず、そのままになっていました。本当にそんな本があったのだろうか、自分でも確証が持たなくなってしまったのです。そこで早速この本を買い求め、いっきに読み通しました。まさしくその本でした。本の内容はここで繰り返しません、この本は本当にど真ん中に直球勝負で数学をやることの魅力を伝えています。また数学者の精神の自由性を中学生にさえ訴えかけて来るものであることを再確認しました。

もっと幼いとき、小学生の頃の思い出ですが、山川惣治という人が書いた「少年ケニア」という新聞連載小説がありました。記憶はあいまいで、もちろん内容は荒唐無稽の作り話ですが、その中にアフリカの奥地に置かれたナチの研究所に集められた科学者達が原爆製造の命令を拒否したため一斉射撃で全員撃ち殺されるというエピソードがあり、子供心に強く印象に残りました。科学者は自分の良心に忠実でなければならない、科学者は研究をするだけでなく科学者としての責任を考えていなければいけない、それを承知した上で自分は科学者になりたい、と思ったのを覚えています。このような姿勢は、当時の時代風潮としても広く行き渡っていたのではないのでしょうか。

高校1年の時は秋田にいました。市立図書館に通ってガロアの伝記である「神々の愛でし人」に熱中して読みふけたものです。ガロアの数学への思い入れのみならず彼の社会変革への情熱にも深く共感しました。私だけに限らず、当時は、多くの人が社会に対しても政治に対してもどうあって欲しいかという自分の意見を強く持っていたと思います。

さて、大学に入学したら、キャンパスは立て看板とピラとアジ演説に満ち溢れていました。時代は1960年代の中ごろで、学生運動が活発でした。その頃の学生運動は一般の学生からも一般の市民からもある程度の支持を得ていたと思います。自分ではその中に入りませんでした。主張自体には納得するところがあり、ある意味で、運動自体が一般の学生の意見を代弁してくれているというような気持ちも持っていました。色々な生き方の選択がありえたかもしれませんが、その頃の私には数学に没頭することを最優先させたいという意識が強くありました。他のことに首を突っ込む余裕はまったく無かったというのも本当の所でした。数学のための数学（あるいは学問のための学問）に没頭することは個人のためというよりも、社会的に正しいことであるとも考えていました。ここで社会的というときの社会の意味は今の日本で考えられているのとは違います。現在の日本では社会がいつの間にか会社にすり替えられてしまっているようです。産学協同などということはあの当時非常に否定的なニュアンスを持った言葉でした。私自身数学者になる以外の選択枝は忌避していました。数学のための数学に没頭していれば少なくとも悪いことに手を貸さないで済むという思いもありました。そうこうして、数学の勉強、研究に必死でもがいて居るうちに少しずつ成果が得られ、助手として就職がかない、一応数学者になることが出来ました。その後たまたまアメリカに職を持って長い期間生活し、日本に戻ってきてから18年余、定年まであと2年弱になったところです。

アメリカは（あるいはアメリカの大学は）競争社会であると言われていています。実際その要素は確かにあります。しかしそれはそれで首尾一貫していて納得出来るところもあります。私自身は Assistant Professor として採用され、Associate Professor への昇進と同時に Tenure を貰い、その後 Full Professor に昇進したという意味でその中で生き残れて幸運であったといえるでしょう。またそこで多くの研究者を育てあげることが出来たのも幸運でした。競争社会の中でも、同僚達はそれぞれ強い個性を持ち、研究者、教育者あるいは大学人や知識人としての高いプライドを持っていたように思います。その点で、アメリカの大学というか私の居たオハイオ州立大学は非常に良い大学であったと今でも非常に懐かしく思い出されます。当時のアメリカでは、外部資金の獲得、学生による授業評価、次年度の給料の査定、などなど、が徐々に始まり、書かなければいけない書類が少しずつ増えていき

ました。日本ではそのようなことは気にしないで済むと思っていました。確かに帰ってきた当初はそうでした。しかしその状況は急激に変化していきましました。現在では書かなければいけない書類の量はアメリカに居た時よりはるかに増えてしまっています。同時に、学問に対する純粋な情熱というか、研究者、教育者、あるいは大学人や知識人としてのプライドは日本では年々失われているように思います。研究費は昔に比べて潤沢になったかもしれませんが。

若い頃数学者という職業に魅力を感じた理由は、数学自体に面白さを感じたことはもちろんですが、それに加えて、他の職業に就くことと比較して、数学者はこの社会の中にあっても精神的自由を比較的保つことが出来ると感じたせいもあります。今にして思えば、中学生になったばかりにそう強く感じていたのですから、精神的に早熟だったのかもしれませんが。この三つ子の魂は今でも自分の中で抜けていないように思います。先日、ローラン・シュヴァルツの自伝『闘いの世紀を生きた数学者』（彌永健一訳）を読みましたが、彼の生き方に強く共感しました。とても自分に真似の出来るものではないとしても、数学者の生き方として精神的自由を保ったまま全うした生涯に魅力を感じました。昔ガロアに対して感じたのと同種の共感です。数学に対するこの種の特別な見方は、我々より上の世代には理解して貰えますが、下の世代に理解して貰うのは難しくなって来ているようです。それでも理解して欲しいと強く願うのです。

現在の日本（世界的にも似た状況にあることも確かですが）において、数学者として（あるいは科学者としてあるいは大学人として）精神的自由を保って研究また学問をすることはますます困難になって来ているように思います。大学の独立法人化、差別化、無意味な評価システム、任期制などによる若手研究者に対する研究条件の劣悪化、などなど、既に状況は十分悪くなってしまっているといえるでしょう。しかも誰もそれに反対できないようになってしまっています。例えば文部省の意に添わないと大学が不利益を被るから、大学当局の意に添わないと教室が不利益を被から...。江戸時代の各藩がお家大事のあまり、諸事万端、幕府の意向に逆らわず恭順の意を示して安泰を願ったような姿勢が今なお根強く残っているようにすら感じられます。しかしこのようなことばかりやっていると、日本の科学は本当に大丈夫なのでしょう？「有識者会議」のような一部の人間、あるいは官僚、ばかりに任せて、一般の科学者が何も言わなく（言えなく）なっている状況は問題に思います。精神的自由を持った各個人が（数学者あるいは科学者として）発言する必要はないのでしょうか？例えば身近な事例として、COEとか超大型の科研費などは日本の科学（数学）の発展全体にとって本当に良い方法なのでしょう？

こうした状況は日本だけでなく世界的な潮流かもしれません。ある意味で東側の崩壊による冷戦の終焉で、お金が万能な風潮に自信を与える追い風が吹いているのではないかと思います。ソ連邦の崩壊は社会主義あるいはマルクス主義が完全な誤りであることを示したと一般に考えられているようですが、本当にそうなのか私はなんとなく割り切れないものを感じていました。私自身は特に社会主義者あるいはマルクス主義者という訳ではありませんが、そうした捉え方に正面から反論する社会学者が誰もいない（ように思われる）ことに不満を感じていました（私が無知なだけだったのかもしれませんが。）実は冒頭に述べた筑摩学芸文庫の『偉大な数学者たち』を書店で捜したとき、すぐ隣に同じ文庫で『21世紀のマルクス主義』（佐々木力著）という本を見つけました。同名の著者の数学史の本を読んだことがあるので、同じ人なのだろうかと思って見てみたら果たしてその通りでした。これも購入して読みましたが、マルクス主義の復権が始まっているという指摘は、楽観的過ぎるかもしれないと思う一方、頼もしさを感じました。この種の本が数学者によって書かれていることは数学者の精神的自由の一つの表れではないかとうれしく思いました。

現在の日本では、数学者が数学を越えて社会、政治に口出しすることはタブーと考える風潮が一般的と思われます。しかし先に触れたシュヴァルツの自伝に述べられているように、数学者は特にその役割を期待されているところもあり、必要な時には躊躇すべきではないと思います。（数学者に期待など誰もしていないとのシニカルな声は聞こえますが。）事なかれ主義的に口をつぐみ、現実社会と安易な妥協を重ねることは許されません。期待の有無にかかわらず、どの時代にあっても、数学者は数学の研究者であると同時に精神的自由を持った存在で在り続けて欲しいと思いますし、科学者としての、あるいは個人としての良心に忠実であるべきだと思います。